

「モンゴル文化研究所」の設立と 青旗研究プロジェクト推進の意義

沼岡 努

平成 28 (2016) 年 4 月、新潟産業大学 (在柏崎市) は附属モンゴル文化研究所を開所し、モンゴル文化全般の調査・研究ならびにモンゴル文化圏に対する理解及び国際交流に寄与することを目的として活動を開始した。平成 19 (1997) 年以來 20 年にわたり約 600 名の留学生をモンゴル (大半は内モンゴル自治区) から受け入れてきた歴史を鑑みると、研究所に課せられた任務、またその責任の大きさを改めて痛感する。

さて、研究所の重要な目的である調査・研究領域において、ある意味わたしはとても恵まれた立ち位置にいる。それはひとえに現在桜美林大学に勤務されている都馬バイカル准教授のご尽力と本研究所ウリジバヤル、ウルジージャルガル両研究員の強力なサポートの賜物と感謝している。バイカル先生は本学在職中、内外研究者に加え本学を卒業し他大学博士課程に在籍ないしは修了した者に呼びかけ、結果、内モンゴルの基本的文献の読解・整理に向けた研究会が発足した。その着実な運営のもと研究会は成果を一つひとつ積み上げてきた。中でも現在進行中の戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ (青旗)』の記事索引整理・分類作業は、将来後進の研究者たちの研究効率を飛躍的に高めると同時に、より深い緻密な研究を可能にする後世に残る一大プロジェクトといえる。

1940 年代前半に満洲国で発行された『フフ・トグ (青旗)』紙が唯一日本に完全に近い形で残存・保管されているという事実だけでもきわめて注目に値する。歴史学的には第一級史料であることに疑念の余地もない。だが、意義はそれだけではない。紙面をおおう記事内容は実に多岐にわたる。国際情勢や内モンゴル=日本二国間関係といったマクロ的視野に立った動向分析から日々の生活に密着した様々なことから、例えばモンゴルの運動会、家庭の幸せ、子供の教育、親の責任、健康法、医薬品の紹介と使用法、家畜の飼育・疫病、モンゴル仏教などなど、枚挙にいとまがない。一般民衆向けのこうした様々な記事に目をやると、ある歴史家が 1990 年頃を境に歴史学が大転換を遂げようとしているというコラムを読んだ時のことを思い出す。かつては時間の流れに沿って描き出す壮大な通史が主流だったが、今日「特定の時代の特定の事実スポットライトをあて、こと細かに具体的に叙述する社会史・日常生活史が人々の知的な興味関心をひきつけている」と。大きな時代、歴史のうねりを大局的とらえることに注視するあまり、一人ひとり生身の人間が

与えられた環境の中で何を考え、どのように生きたかを軽視するようであってはならない。

この意味において、『フフ・トグ（青旗）』紙の個々の記事を整理、類別化することは気の遠くなるような忍耐力と時間を要する作業だが、こうした関係者の並々ならぬ努力の上にやがてはそれらが統合化され、一地域が特定の時代に果たした歴史的、社会的、文化的役割が鮮明によみがえるのである。『フフ・トグ（青旗）』紙はこのような作業を最後まで遂行するに十分価値のある現存する貴重な資料なのである。

(ぬまおかつとむ・新潟産業大学モンゴル文化研究所所長)